

- LIGHTFOOT: Transport Phenomena, (1960), p. 523 [John Wiley & Sons, Inc.]
- 13) 大谷正康, 徳田昌則, 井上博文: 鉄と鋼, 66 (1980), A137
- 14) P. C. GHOSH and E. G. HESS: Science and Culture, 28 (1962), p. 386 [Calcutta]
- 15) O. KUBASCHEWSKI, E. LL. EVANS, and C. B. ALCOCK: Metallurgical Thermochemistry 4th edition, (1967), p. 378 [The Pergamon Press Limited]
- 16) 加藤栄一, 山田啓作, 山本正道, L. L. MESHKOV: 鉄と鋼, 66 (1980), p. 2032
- 17) J. J. de BARBADILLO: Reactivity of Magnesium and Calcium in Liquid Steel, International Symposium on Sulfide Inclusions in Steel White Plains, N. Y., November 7 (1974), p. 70
- 18) D. L. SPONSELLER and R. A. FLINN: Trans. Met. Soc. AIME, 230 (1964), p. 876

コ ラ ム

大きな装置, 小さな装置

先般, 鉄鋼協会から「我が国における酸素製鋼法の歴史」が出版されたが, ちょうどその原稿の執筆期間中に, オーストリア以外の国で最初にLD転炉を稼働させたカナダのDofasco社を訪問する機会があった。ここに示した写真は, その際にいただいた同社の最初の試験転炉である。試験転炉と言つても, 一つの取鍋の底を抜いてひっくり返しもう一つの取鍋に重ね合わせただけのものである。リンツでLD転炉が開発されたときにも取鍋改造転炉が活躍し, 日本鋼管でも取鍋を改造した転炉から出発している。

これらの試験転炉と今日の転炉を比べると, 月とスッポンの差があるが, 一方, 我身に立ち返り, 大学の研究室の道具とこの試験転炉をくらべると, これまた月とスッポンの差がある。自分の行っている卒業研究が鉄鋼の生産とどのように関連するのか, という学生の質問も無理からぬものと思う。

(千葉工業大学 雀部 実)

